

## 論文

## 観光学研究の方法論的理論的諸方向

## —観光学研究パラダイムの整理の試み—

Methodological and Theoretical Directions in Tourism Studies:  
A Classification of Paradigms and Approaches

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

キーワード：観光学方法論、観光学パラダイム、観光学アプローチ、観光学の哲学的諸問題

Key Words : methodology of tourism studies, paradigms of tourism studies,  
approaches of tourism studies, philosophical issues in tourism studies

## Abstract :

In tourism studies of today there are so many different theoretical constructs claiming paradigm or approach, that we may call the situation as if a jungle. In this paper a methodological classification of these constructs according to epistemology, ontology and fundamental research principle is tried.

## I. まえがき

観光の研究は、現在、世界的に実に盛んである。例えば、英国では、2006年現在、観光に関する学術雑誌は国内誌を含め40、観光に関するドクター論文は1990年から2002年の間に8倍以上になっている (z.p.5)。

しかしその一方、観光の研究には理論がない (atheoretical)。事実の調査的なものに終わっているという声もかなり高い。1990年にアップ (Ap.J.) は、観光学研究では理論のないことが最大の問題点であるとし、「実態調査的な段階から、理論的研究の段階、すなわち理論的フレームワークのなかで研究が行われる段階に移るようにしないと、10年たっても進歩はないであろう」と述べているが、これを1999年ペアース (Pearce, P.L.) / モスカード (Moscardo, G.) は引用し、そのことは1999年でも妥当すると確認している (s.p.46)。

こうした観光学研究の無理論性、無方法論性、無哲学的思考性を強く指摘してきた一人にトライブ (Tribe, J.) がある。かれによって2009年“*Philosophical Issues in Tourism*” (参考文献β) と題する編著が刊行された。これは、こうしたテーマのまとめたものとして恐らく最初のものと思われる。同書で編者トライブは、今日のツーリズム研究における哲学的中心問題として「真理」(truth)、「美」(beauty)、「道徳・倫理」(virtue) の3者を挙げている。真理は観光理論の認識論の問題、美

は観光客の求めるものが何かを問う、観光 (客) の目的に関する問題、道徳・倫理は環境保全と両立した観光の必要など、観光 (客) のあり方を問うものである。

さらに、方法論に関連した試みが近年いくつか現われている。例えば、観光学研究の大きな分野をなす地理学 (的アプローチ) で、2009年、ツーリズム地理学 (単数) からツーリズム地理諸学というべきものに移行しつつあることを指摘する方法論的論究が現われている (参考文献1)。これをみると、20世紀初頭ドイツであった商業諸学 (Handelswissenschaften) から商業学 (単数: 後の経営学) への移行をめぐる方法論的動きが髣髴とさせられる。

本稿は、トライブの前掲編著や最近の方法論的論究に依拠して、観光学研究の原理的、方法論的な諸問題について、最近の国際的論調の動向を考察し、観光学研究の諸方向について1つの整理の試みを提示するものである。

こうしたいわゆる現代のパラダイムないしはアプローチとしては、本稿で取り上げているもの以外に、さらに少なくとも観光客行動論 (観光客満足論)、コミュニティ基盤ツーリズム論、統合的ツーリズム論、観光 (地) マネジメント論、観光地ライフサイクル論が挙げられなければならないが、これらについてはすでに別稿で論じた (参考文献λ~τ)。

本稿では最初に、トライブの所論をレビューする。それは観光学を含む社会科学の根本的方法論について論じ、批判

主義的見地 (critical theory) がとられるべきことを主張したものである。トライブ自身の主張は2008年の論考 (参考文献a) で展開されているが、2009年刊行のトライブの前掲編著で、アイコル (Ayikoru, M.) も基本的には同様な主張を行っている (参考文献b)。ここではトライブの2008年論文を主たる対象とし、アイコル論文を補足的にとりあげる。

なお、本稿では英語の tourism をツーリズムもしくは観光と適宜に表現していることをお断りしておきたい。power は権力という意味を含むので「パワー」とはせず「力」としている。また、参考文献は末尾に一括して掲載し、典拠箇所は文献記号により文中で示した。

## Ⅱ. ツーリズムの批判主義理論

トライブは、まず、現在のところ、社会科学の場合、方法論的には大別して次の3者があるとする (a, p.246)。

第1は実証主義 (positivism: ポスト実証主義 (postpositivism) も含む) である。これは自然科学的パラダイムとっていいものである。理論は実証可能な事実のみに立脚することを主張するもので、現在では多くの場合、まずなんらかの仮説をたて、それが客観的事実により実証されたかどうかという方法をとる。それ故、量的側面が前面にたつことが多く、質的側面は反証可能性 (falsifiability) をもち、かつ価値中立性が必要とされる。ポスト実証主義は、現実の実証性について厳密性の基準がやや低いが、しかし少なくとも三段論法の実証を必要とする。

第2は解釈主義 (interpretivism) である。これは人間行動や社会的構成物等では意味と理解が重要であるという立場をとり、自然科学のような純粋な客観主義的方法はとらない。実証主義では人間はあくまでも客体としてとらえられるが、ここでは (行為の) 主体として把握される。研究に際しては研究者の主観は排除されなくてはならないが、研究対象 (他の人間等) との協働と対話が重視される。研究方法としてはインタビューや観察、ケーススタディ、言動の文化層的究明 (emics) などが可とされる。

関連して構成主義 (constructionism) は、トライブ論文では解釈主義のなかに含められ、次の批判主義との中間的存在と位置づけられているが、アイコル論文では、解釈主義とは別のものとして扱われ、一言でいえば、社会的事物・事象 (social world) は自然的に与えられている所与というのではなく、社会的に論議により (discursively) 構成されるものと把握される (b, p.72)。

第3 (アイコル論文では第4) は批判主義である。これは、トライブがツーリズム研究でもぜひ必要と主張しているものである。一言でいえば、ハーバーマスのフランクフルト学派に始まり (b, p.73)、なんらかの程度で批判的見地を前提とし、歴史的リアリズム (historical realism) を理念とする。それ故、実

証主義や解釈主義とは根本的立脚点を異にする。この点についてトライブは次のようにいっている。実証主義では第三者的な、ある意味では単なる観察者の立場の貫徹を絶対的前提とするが、批判主義は当事者の立場 (first person reporting) を認めるものである。また、解釈主義に対しては、その解釈が慣例的な考え方 (knowledge-conventions) のもとになされ、事象の真の解釈とはなっていない場合があるという批判的態度をとるものである (a, p.248)。

その際トライブは、その主張する批判主義的パラダイムが近年ではキンチェルー (Kincheloe, J.) / マクラーレン (McLaren, P.) のまとめに最も明解に示されているとしてそれを引用している。これがトライブの主張する批判主義理論の概要である。トライブはそのうえにたつて、ツーリズムの批判主義理論として特に問題となるものとして、ツーリズムのマネジメントとガバナンスを挙げている。

図表1：批判主義理論の諸命題

命 題	関連キーワード
① 批判的開明 (critical enlightenment) : 特定の社会的関連のなかで生まれる勝者と敗者を明らかにし、こうしたことを生み出す力 (power) が作用するプロセスの究明。	力。開明。社会構成。正義。公平。フェミニスト。ジェンダー。排除。抑圧。不平等。
② 経済決定主義の否定: 社会問題決定要因には経済以外にも種々な要因があることの主張。	力。
③ 批判的解放 (critical emancipation) : 人間としての自立性と人間的機能の度合いを向上させるようにすること。	解放。自立性。代理・代表。自由。ユートピア。
④ 技術的合理性への批判的態度: 事実と価値との分離。目的より手段に注目することなど。	価値。ハーバーマス。
⑤ 欲求 (desire) : 欲求のインパクトの解明や、力・合理性・感情との相互関係の再検討など。	欲求。力。マルクーゼ。
⑥ イデオロギー: 支配的イデオロギーやコミュニケーションの役割などの解明。	イデオロギー。コミュニケーション。
⑦ ヘゲモニー: 支配力の浸透が可視的な物的手段以外でもなされることなどの解明。	ヘゲモニー。抑圧。グラムシ。
⑧ コミュニケーション力: 言葉は中立的なものではなく、社会構成上の用具であることなどの解明。	コミュニケーション。フーコー。
⑨ 文化・力・支配: 大衆文化はコントロール手段として機能するものもあることなどの解明。	力。見る目 (gaze)。
⑩ 文化的教育: 文化は特定のヘゲモニー確保の手段であることなどの解明。	ヘゲモニー。イデオロギー。
⑪ 批判主義の一般的ドメイン	批判。批判主義理論。グラムシ。アドルノ。マルクーゼ。ホークハイマー。マルクス。

出所: a, p.247.

マネジメントの問題では、ツーリズムでも経営（者）主義（managerialism）イデオロギーが支配的となっており、批判理論を展開することが必要であると強調する。すなわち、「批判主義理論は一般慣例的なマネジメント方法をイデオロギー的に批判し、より有意義な利害関係者分析をなしうる方法を生み出しうるものである」（a,p.249）。ただし、ここでいう利害関係者は、発展途上国では何よりも地元住民をいうものであり、本来その土地で生きている人たちをいうものである。

今1つの問題であるガバナンスとは、個々のツーリズムのそれではなく、世界的なツーリズム全体としてのガバナンスを問題とするもので、トライブが論じているのは何よりもツーリズムの安全性であり、テロリズムの脅威をなくす問題である。この問題については、その時々や事件に応じて対処方法が提示され論じられてきたが、トライブによると、それらはすべて技術的な対処方法であって、根本的な解決方法とはなっていない。根本的解決は、批判理論でいう批判的解放、すなわち人間としての自立性と人間的機能の度合いを高めるという方向でしか道はないであろうとしている。

以上の諸点をみると、現時点におけるツーリズムの批判主義的理論としては、結局、イデオロギーと力が最も重要な論点となる。

ところが、批判主義的理論は、トライブの調査によっても、あまり広まっていはいない。例えば、1974年から2005年までに刊行されたツーリズム・ホスピタリティ・レジャー・スポーツに関連した文献400種のデータベースによると、それに含まれている論文や資料など35,194点中、前記図表1の「批判主義関連キーワード」についてヒットしたものは659点にすぎない（a,p.253）。

そこでトライブは、リレー（Riley,R.）らが2000年に「4つのツーリズム学術誌掲載の論文について、量的分析方法と質的分析方法のいずれを用いているかによってサーベイしたところ、主流的方法是実証主義的方法であった」（u,p.180: cited in a,p.253）としている結論を認めざるをえないとしたうえで、最後に、現在のツーリズム研究上最も重要な課題は、大別すると、次の2者であるとして、次のように述べている。

1つは、交通や通信手段における技術進歩などのような技術的問題である。今1つは、持続的発展、テロリズム抑制などのような安全性向上、グローバリゼーション化の進展、富の偏在是正などである。

前者は実証主義で充分対処できるが、後者は実証主義では対応できない。特に力とイデオロギーに関係した問題では、批判主義的研究が不可欠である。ツーリズムが技術的な問題さえ解決できればいいという視点のみで推進されるならば、経済領域で格差深化などがさらに進行し、「地球温暖化により重大な影響が現れるよりも以前に、間違いなくツーリズムにより人々の間で疎外感の進展がおき、ツーリズム自体の壊滅的な消滅（catastrophic demise）の時が来るであろう」（a,p.254）。

実は、トライブの出発点となっているのは、現在、ツーリズムが、一般的にみれば、無コントロール的な放縱的な状態（out of control）にあり、看過できないという認識である。広く現代社会全般についてそうした状態にあることを、有名な論客ギデンスは2002年「ランナウェイ社会」（runaway world）と特徴づけているが、トライブはそれにならって現在のツーリズムを「ランナウェイ・ツーリズム」とよんでいる。これは、トライブによると、ネオリベリズムの自由主義的・市場競争主義的・生産力向上主義的思考に基づき、ツーリズムが自由競争的にあおられ、適正な発展が阻害されているものであるが（β,p.4）、その統御のためには、何よりもツーリズムの理論、方法論的確立が不可欠というのである。

さらに2009年の、直接的には英国のツーリズム高等教育の現状を概括したアイコル／トライブ／エアレイ（Airey,D.）の論文（参照文献c）では、ツーリズム高等教育が全くネオリベリズムの見地にたつ経営（者）主義に彩られたものとなっており、力・イデオロギーなどの分析に焦点をおくところの、社会学や政治学等に見られる教育に変わるべきことを訴えている（c,p.214）。ただし、この論考によれば、トライブ自身の立脚点が厳密には批判主義にあるのかポスト構成主義にあるのかは不明確である。

いずれにしろ、以上のトライブの所論で留意されるべきことは、そこで論じられているものが、ツーリズム論の最も根本的な認識論的原理であり、方法論的原理の違いを問うものであることである。これに対して、本稿後半の「V. 持続可能ツーリズム・パラダイム論」以下でとりあげる論者の所論は、そのうえにおいて、いわば「問題のとらえ方の違い」を問題にするものである。両者は、観光学方法論としてレベルが異なる。

学問方法論は、当然ながらも方法論的原理により区分されることを必要とする。トライブの所論に則していえば、実証主義と解釈主義とは、根本的には現実所与の立場をとり、その批判に志向する批判主義とは原理的に対立する。このような現実理論と批判理論（次の規範理論も含む）との対抗は、社会科学では多くの学問分野でみられる基本的な対立である。トライブは、ツーリズム論についてまさにこの点の問題提起をしているのである。

一方、批判理論は、広くとれば、とにかく現実のあるべき姿（当為）を論じるものであり、現実理論ではないという意味では、批判の観点が、トライブの挙げたもの以外にもありうる。例えば、倫理的道德的批判の立場で、こうしたものは広くは規範理論として社会科学の多くの分野で主張されている。それはツーリズム研究にもある。次に、この点を焦点とした最近の論調を考察する。



### Ⅲ. ツーリズムの倫理性の根拠

ツーリズムの倫理性の問題は、近年では多くの場合、後述の持続可能な発展のうち持続性命題に関連して提起され、持続可能なツーリズム論の土台をなすものとして、ツーリズムの現状批判、その道徳化あるいは倫理化の主張として展開されている。ここでは、倫理的ツーリズム論の土台をなす倫理の問題について、根本から改めて体系的に論じたフェネル (Fennell, D.) の 2009 年の論考 (参考文献 i) を考察する。

フェネルは、こうした倫理もしくは道徳の土台をなすものは価値 (value) であるとして、その体系的分析を行う。ここでいう価値は広い意味のもので、人間行為の本源の動機となる「値うちのあること」といったものであるが、ホッジキンソン (Hodgkinson, C.) に依拠して次の 4 つのレベルに分けるのが望ましいとする。

最低次のレベルは、自己の生存欲求あるいは快楽追求欲求に志向した自己中心的価値観である。心理的には感情や好き嫌いなどのレベルである。次に高次のレベルは、なんらかの程度で他人との協調を前提にしたコンセンサスの価値観で、自己以外のものについての認識、理性、考慮等を含むものである。さらに次の高次のレベルは、結果をも考えた結果的価値観で、理性等が働く。次の最高次のレベルは、理性を超えた (transrational)、人間としてなすべきこと (authentic) に志向した、原理的 (principle) 価値観である。

この倫理の 4 階層は、マズローの欲求 5 階層説を髣髴させるものであるが、ツーリズムを含む人間行為についてみると、行為の目的にかかわるものと、手段にかかわるものとに分かれる。

まず、人間行為の目的は、フェネルによると、エウダイモニア主義とヘドニズムとに大別される。エウダイモニア主義はアリストテレスに始まり、一般的には精神生活の充実をもって人生の目的とするものであるが、フェネルによると、これを英語で表現すると“flourish”を求めることをいい、実際には、過ぎたることをしないという中庸の態度 (moderation) をとることである。従ってツーリズムでは、開発し過ぎもよくないし、開発不足もよくないという。

他方、ヘドニズムは快楽追求主義といわれ、対象相手により利己主義、利他主義、功利主義の 3 形態があるが、これは端的には外部的な道徳的な批判がないものをいい、ツーリズムでは、観光資源に対し自己中心的あるいは主観的な態度をとるものである。これに対していえば、エウダイモニア主義は客観的な普遍主義的な態度をとるものである。

集団のレベルでみると、最大多数の最大幸福を志向する功利主義が問題になる。功利主義は、中世のように善悪の判断を宗教的戒律で決める時代から、それを一般人に取り返したものであるという意味をもち、その歴史的意義は否定されるべきものではないが、今日の倫理的観点では最大多数の最

大の善 (the greatest good for the greatest number) として理解されるべきものとなる。

功利主義に関連しフェネルは、今日のエコツーリズムに対しても批判的見地を提起している。現在の形では、経済的利得が一部の者の所有に帰し、真に環境保護のためのものとはなっていないとして、功利主義の立場からみても失敗のものであると評している (i, p.218)。

今 1 つの問題である人間行為の手段は、フェネルによると、人間の義務論 (deontology) の問題で、具体的には倫理階層の最高のレベル、すなわち原理 (的価値観) にかかわるものである。その根源には 4 者がある。第 1 は宗教等である。第 2 は社会契約的な規範で、人権宣言、憲法、当該団体の綱領や規約などがある。ただし団体の規約等では順守をめぐってトラブルがおきうることをフェネルは充分認めている。第 3 は、フェネルがカント主義といっているもので、カントのいう絶対的命令 (categorical imperative) をいう。第 4 は、フェネルが実存主義 (existentialism) とよんでいるもので、人間の意志 (the will) に基づいた行為をいい、ツーリストが善良なる信念 (good faith) に基づいて行動することをいう。

一方、これに対して、こうした「ツーリズムの道徳化」 (moralisation of tourism) は、ツーリズムの果たしている経済振興的役割や、一般庶民のツーリズムを求める欲求を貶置するものであり、認められないとする主張が、ブッチャー (Butcher, J.) により提起されている。次に、これを考察する。

### Ⅳ. 倫理的ツーリズムの反対論

ブッチャーの所論は、2003 年まとまった著書として展開されたが (参考文献 d)、2009 年それを補足する論考 (参考文献 e) が発表されている。かれの所論は、何よりも、ツーリズムのこれまでの歴史は、ツーリズムを一般庶民・勤労者たち (working class) に広め、民主化する (democratisation) 歴史であったが、それは同時に、そうしたことに対する批判・反対の歴史であったことを主張するものである。

ツーリズムはもともと少数の富裕層の独占物であった。というよりも富裕層でしかできなかったものである。近世になって、端的には 1840 年代トーマス・クックにより一般庶民を対象にした団体的ツーリズムが始まり、一般大衆も楽しめる日常行為的なものとなったが、これに対しても、ツーリズムの品位をおとすものという批判があり、トーマス・クックがそれに反論するという一幕があった (d, p.33)。ブッチャーによれば、「ツーリズムの普及・拡大に対する批判は新しいものではない。庶民がレジャー目的で旅行する現象が起きるつど、いつも起きていたものである。それは、ツーリズムを独占しておきたい富裕層からの批判である」 (d, p.33)。

近年におけるツーリズムの道徳化は、大別して、2 つの観点からなされている。第 1 に、これまでの大衆的ツーリズム、

すなわちマスツーリズムは環境悪化をもたらしているから、これを抑制する必要があるというものである。第2に、ツーリズムを道徳化し、倫理的ツーリズムを体験すると、ツーリストはツーリズム以外の領域でも倫理的に行動し、従来の行動を自省するようになるというものである。

こうしたツーリズム道徳化の主張に対して、ブッチャーは、それらは一般大衆にツーリズム抑制を呼びかけることによって、一般大衆をツーリズムから締め出す作用をもつものと強く主張する。少なくとも、客観的あるいは結果的にはそういわざるをえないものであるという。この場合、ブッチャーの倫理的ツーリズム批判は、理論的には大別すると、次の2つの論拠に基づいている。

第1の論点は、ブッチャーによれば、人間生活 (welfare) の根本は経済的なものにあるにもかかわらず、倫理的ツーリズム論では、ツーリズムの果たしている経済的役割がほとんど無視され、ツーリズムが文化的ないし環境的な問題に局限されてしまっているところにある。例えばエコツーリズム等では、住民の経済生活改善の観点なしに、環境保持のみが叫ばれることがある。そうすると、旧来の経済水準 (多くの場合低水準) からの脱却の観点が希薄になる (e.p.256)。

倫理的ツーリズムにおける経済的側面の軽視は、かれによると、現代経済の根本的動因がどこにあるかについての考え方の変化を反映したものである。倫理的ツーリズムは、今やそれが生産領域にあるのではなく、消費領域にあり、消費 (者) の力によって経済のあり方を変えることができる時代になったという認識にたっている。ツーリストを含め消費者が倫理的に行動することによって (ethical consumerism)、社会を変えうというものである。

こうした消費者重視、あるいは生活 (者) 重視の考え方に対して、ブッチャーは、経済が基本的に資本主義体制のもとにある限り、消費者はあくまでも個人的存在であり、受動的なものであって、集団的には無力であり、経済の根本的な動因となるものではない、と反論している。確かに、倫理的ツーリズムでも、経済的側面はまったく無視されているのではない。しかしそこで想定されている経済活動は、あくまでも環境に適合した小規模なもので、住民の経済生活水準向上に役立つものではない (e.p.253)。

こうした点は結局、倫理的ツーリズム論では、環境 (特に自然環境) が根本的には発展・開発できない静止的なもの、固定的なものにとらえられているところに根本的起因がある。これが、倫理的ツーリズム批判のブッチャーの第2の論点である。こうした自然の収容能力 (carrying capacity) は一定とする考え方は、マルサスまで遡るが、これまでの歴史をみれば、ツーリズム分野を含めて、収容能力は人間の営為により変わりうるものである。マルサスによれば「人間が問題」 (people as problem) であったが、今や「人間こそ問題を解決できる根源」 (people as resolution) とみるべきである、とブッチャーは力説

する。(d.p.59)。

ブッチャーによれば、自然を固定的なものとみる考え方も、生産軽視、消費 (者) 重視の考え方の反映である。要するに、倫理的ツーリズムは、人間の力に重きをおいているようにみえるが、実際には人間の営みの軽視という特色をもつものである。

もとよりブッチャーは自然の保護・維持に反対ではない。そうした名のもとに行われる一般大衆のツーリズムからの締め出しに反対しているのである。ツーリズムの大衆化は人類進歩の一部分をなすというのが基本認識である (e.p.258)。それ故、マスツーリズムに反対ではない。「マスの擁護」がキーワードの1つである。

現在のような資本主義的市場体制のもとでは、それは大量生産・大量消費体制に見合ったものであり、少なくともそうした体制のもとで労働し生活する一般庶民・勤労者に対して生活の向上をもたらす有力な手段である、というのがブッチャーの言わんとするところである。

マスツーリズムの擁護論は、2006年シャープレイ (Sharpley, R.) によっても “In Defence of Masstourism” の形で提起されているが (cited in w.p.147)、これらの主張は、直接的には、ツーリズム道徳化の反対論である。広くは、現実批判に対する反論であり、経験論的立場にたつものである。従って、方法論的にはライブラの批判主義にも反対という位置づけになる。

ところで、倫理的ツーリズムの推進論と批判論との対立についていえば、両者はいずれも現代ツーリズムの本質を問うものであり、相対立する2つの考え方である。しかしいうまでもなく、両者を統合したところに、すなわち一般大衆のツーリズム欲求を締め出さない形で、環境保持を根本原則としたツーリズムが展開されるところに現代ツーリズムの課題はある。マスツーリズムは否定されることはないが、旧来ややもすればみられた快樂追求的な環境無視的なそれは、大いに反省されるべきである。この意味では現代ツーリズムについてなんらかの批判的ないし規範的な立場をとることも必要ということになる。

以上は基本的な認識論の問題であるが、次に「問題のとらえ方」に関するいくつかの方法論的 (パラダイム論的) 試みを考察する。最初にまず、「持続可能ツーリズム・パラダイム論」とよぶべきものをとりあげる。これは支持者が多く、今日最もオーソドックスなパラダイムとっていいものである。

## V. 持続可能ツーリズム・パラダイム論

今日一般に持続可能ツーリズム論といわれるものは、1980年代国連が今日における発展・開発のあり方として提起した持続可能な発展 (sustainable development) の命題をツーリズムにあてはめ、そうした持続可能な発展の枠組みにおいてツー



リズムがなされること、すなわち持続可能なツーリズムを指導原理とするものである。

まず、ここで前提になっている持続可能な発展は、図表2のように概括されうる。一言でいえば、ツーリズムは環境保持に志向し、その範囲内で行われるべきものであり、このような持続可能なツーリズムによってツーリズム自体の持続的な存在・発展も可能というものである。その際、多くの場合、資源には大別して3種のもの、すなわち自然資源、文化的資源（歴史的社会的資源等も含む。以下同様）、人為的資源（意識的な人間営為による人工物資源等）があるとされ、資源維持について、例えば自然資源・文化的資源が人為的資源により置き換えられることが一概に否定されるのではない。しかし置き換えには厳格な基準が必要で、実際には置き換えできない場合が結構ある。置き換えが可能な場合でも、少なくとも人為的資源を含めた資源全体において減少のないことが必要とされる（y.p.17）。

図表2： 持続可能な発展の諸原則

- |  |
|--|
| <p>(1) 基本原則</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 全体的アプローチ： 発展・開発は地球規模で、社会的、経済的、エコロジーの観点を統合した形でなされること。</li> <li>② 未来志向性： 人間・社会を含め環境の将来像を考えた長期的視野にたつこと。</li> <li>③ 公平性： 資源使用について将来世代との間だけでなく現在世代同士の間でも公平性・公正性を図ること。</li> </ul> <p>(2) 発展性目的（development objectives）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① すべての人の生活の質を改善すること：例えば教育機会の向上など。</li> <li>② 基本的ニーズの充足：所得の向上よりも所得により消費できるものに視点をおくこと。</li> <li>③ 自立性の確保： 政治的自由の確保や、地域の自律的意思決定の確保。</li> <li>④ 内発的発展の確保</li> </ul> <p>(3) 持続性目的（sustainability objectives）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 持続可能な人口水準の維持。</li> <li>② 再調達できない（自然）資源が減ることを最小にすること。</li> <li>③ 再調達できる資源の持続的使用を確保すること。</li> <li>④ 公害は環境同化能力の範囲内にとどめること。</li> </ul> <p>(4) 持続可能な発展の必要要件</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 持続可能な生活に必要な新しい社会的パラダイムを適用すること。</li> <li>② 公平な資源使用に志向した政治的経済的システムを国際的国内的に確立すること。</li> <li>③ 環境問題の新しい解決を絶え間なく追求する技術システムの確立。</li> <li>④ 地方、国内、国際レベルで統合的政策を推進できる全地球的な協働体制の確立。</li> </ul> |
|--|

出所：v.p.329.

ところが、持続可能な発展の概念はもともと一義的なものではなく、ツーリズム研究分野でもかなりの論争（sustainable tourism debate）があるものである。何よりも論議の多いのは、国連の規定等で持続可能な発展といわれるものには、持続性の観点と発展の観点とが併存しているという点である。すなわ

ちそれは、一方では持続的な維持・保持という観点をもつものであるとともに、他方では、たとえその枠内であるとはいえ、発展・開発を認めるものとなっており、そのいずれに重点をおくかによって実際の内容はかなり変わったものとなる（v.p.325; k.p.8）。

さらに、持続可能な発展は、目的・目標（goal）を示したものではなく、物事の進め方・プロセスを示しただけのものという見解があり、それをめぐっても論議がある（k.p.7）。また、発展の程度についても、環境保護を第一義とするエコツーリズムなどと、それよりも緩やかな基準で発展を考える「より広義の発展」（broader sustainable development）との間に論議がある。この場合、エコツーリズムにしても経済的維持が否定されるのではない（v.pp. 322,327）。

これは持続可能な発展という命題の二重性もしくは撞着性（oxymoron）といわれるが、このため、持続可能な発展は理論上でも実践上でも一義的なものではなく、多様なものとなる。これは、この概念のファジー性といわれたりするが（θ.p.40）、もともと意識的に生み出されたものといわれる。というのは、これは、発展をすべて否定するものと、発展の必要を主張するものとの妥協点を求めて生まれたものであり、利害や立場が異なる多くの人々にとにかく受け入れられる概念として案出されたものであるからである。それは環境保護について積極的立場を放棄したものでもないし、発展を否定したものでもない（v.p.325）。

ところで、持続可能なツーリズム論は、直接的には、旧来のマスツーリズムによる環境破壊の行為の反省にたつて、およそ1980年代に定着したものであるが、1990年ツーリズム産業についてバンクーバーで行われた「グローブ90会議」（Globe 90 Conference）で合意されたところによると、その指導原理はおおよそ図表3の通りである。これは、直接的にはツーリズム産業を対象にしたものとはいえ、経済的活動の1種としてツーリズム（産業）を正当化したものというニュアンスが強い。

図表3： 持続可能なツーリズムの原則

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① ツーリズムは、他の経済的活動と平等の地位にあるものであって、持続可能な経済発展の1つの分野である。</li> <li>② ツーリズムを他の経済諸部門との関連においてとらえ、分析し、モニターするために、ツーリズムについて適切な情報ベースがなくてはならない。</li> <li>③ ツーリズムの発展は、社会の持続可能な発展と両立した形で行われなくてはならない。</li> </ul> |
|--|

出所：v.p.327.

かくて、持続可能なツーリズム論は、経済的側面を含んだ全体的な（holistic）観点をとるものであり、相反することがありうる二重の要請を含んだものとなる。一方では、ツーリズムについて自然資源、文化的資源などの全地球的な維持を条件

にしたものであることを求めるとともに、他方では、ツーリズムについて社会の全体的な発展の一部として適正な発展が図られることを求めるものとなる。少なくともそれは、マスツーリズムの禁止などツーリズムの一面的な制限を主張するものではない。

ただしこれは、ツーリズムについて、持続可能な発展の観点から時と所により多様な形や内容があることを基本的スタンスにするものであるから、時と所によりマスツーリズム的な大量ツーリズムを否定し、小規模な、例えばコミュニティ基盤ツーリズム等が可とされることもある。しかし、すべての場合についてこうした形のツーリズムを主張するものではない。

持続可能なツーリズム論は大要以上のようなものである。ところで他方、ツーリズムは、これをその物自体においてプロセス的にみると、自宅（準じる所を含む）における準備活動段階→観光地への移動段階→観光地の滞在段階→帰宅のための移動段階→帰宅後の総括段階に大別され、しかも各段階の行動内容はかなり質的に異なり、観光客満足も段階ごとに異なることを大きな特徴とする。これは観光のシステム性といわれるものであるが、観光は、通常の物品購入の場合と異なって、このことを強い特徴とするから、ツーリズム研究の原点はここにおくべしとする主張が早くから展開されてきた。「ツーリズム・システム性・パラダイム論」である。ツーリズムのシステム性そのものについてはすでに別稿で論じたので（参考文献π）、ここでは、その学説史的研究を展開している2009年のネットー（Netto,A.P.: 参考文献r）の論考を中心に考察する。

## VI. ツーリズム・システム性・パラダイム論

ネットーの所論は、結論を先にしていえば、ツーリズム研究において理論がないといわれるのは、パラダイムとっていいものがまだないためであるという認識にたつて、現段階においてツーリズム研究のパラダイムとなるものは、一般システム論に立脚した「ツーリズム・システム性」(tourism system)であると規定し、その立場においてこれまでのツーリズム研究を考察し、次の4段階に大別されうべきことを主張するものである。

まず、ツーリズム・システム論がパラダイムになる根拠として、根本的には2点が挙げられている。第1にシステムの研究は、ツーリズム研究で広く普及しているばかりか、研究分野を広くとることができ、理論の有効性が大きい。第2にそれは、ツーリズムという現象のダイナミックさを最もよく説明できる。ただし、この点については、ツーリズム・システム論でも包括できない要因等のあることが認められるとしている。ツーリズム・システム論というパラダイムからみた4段階の主な特徴は下記のごとくである。

① パラダイムであるツーリズム・システム性論という観点を特に意識する以前の研究 (pre-paradigmatic phase): この段階

では、一般的には、ツーリズムは1つの実体 (entity)をなす領域であることが認識されながらも、いくつかの学問の研究対象となるものという見解がとられ、ツーリズム全体に適用されうべき1つの方法があるという考えは希薄であった。ツーリズムの学際性は認められるが、1つの統一的方法によりそれが説明されうべきものという考えはまだとられてはいない。

② ツーリズム・システム論という観点で研究を行っている段階のもの (tourism system phase): この段階の論者として挙げられているものにまず1967年のクエルボ (Cuervo, R.: cited in r,p.50) の試みがある。そこではすでにシステムという言葉が使われ、ツーリズムは旅行代理店、観光地への交通、ホテル、ガイド、レストラン等、土産物などショッピング施設等から成る1つのシステムとして明確に提示されている。クエルボでは、ツーリズムは何よりもコミュニケーションのシステムとしてとらえられているが、一方、ツーリズムを1つの事象 (a phenomenon)として把握し、人間行動のシステムとしてとらえたものも紹介されている。

ネットーの所論では言及されていないが、これに入るそれ以後の論考には、一般的には、1978年のピザム (Pizam,A.)、1990年のレイパー (Leiper,N.)、とりわけ2008年のニール (Neal,J.P.) / ガーソイ (Gursoy,D.) の試みなどがある。それらについては別稿で論じたので、文献等もそれを見られたい (参考文献π)。そこにおいて、少なくとも観光客満足についていえば、ツーリズム・システム性論が本来の観光客満足理論を提示しうべきものであるという私見を提示している。

③ 次の新しい段階への移行段階にあるもの: これに入るものとしては、例えば2003年のモリナ (Molina,S.:cited in r,p.53) の見解が挙げられている。モリナはツーリズムについて、近代以前のもの (pretourism)、近代のうち、概ね1990年代までのもの (tourism)、1990年代以降のもの (post-tourism)の3者に分け、現代のツーリズム、すなわちポスト・ツーリズムについて分析を試みているといわれる。また、ここに入る論者には、アスカニオ (Ascânio,A.: cited in r,p.54) のようにツーリズムは1つの学問分野 (a science of tourism) をなすものとしているものもある。しかしネットーは、アスカニオらの主張には学問的立証がないと評している (r,p.54)。

④ ツーリズム・システム論を超えたり、それに代わるべき新しいアプローチを提起しているもの (a new approach phase): それには、本稿でとりあげているトライブとともに、批判主義的理論の主張者としてネチャール (Nechar,M.C.:cited in r,p.54) らも挙げられている。ネチャールの主張は「批判的認識論」(critical epistemology)で、ツーリズムの再帰的解釈的批判 (reflexive and interpretative critique) に志向したものとされる。ポストモダンの枠組みでツーリズムをとらえようとするものとしてはトリゴ (Trigo,L.G.G.:cited in r,p.55) が挙げら

れている。トリゴはツーリズムとレジャーを新しい社会モデルのもとに提示しているといわれる。

この段階に入る論者にはそれ以外に種々なものがあるが、少なくともトライブラと並ぶものとしてはマッカネル (MacCannell, D.) が挙げられるべきではないか。マッカネルはすでに1989年の著 (参考文献q:2nd ed.) で、ポストモダンも視野に入れ、モダン (端的には20世紀の後期資本主義) からポストモダンには革命 (revolution) が起こるとして、それには通常いう意味での革命とツーリズムとがあるとしている。

ここでいう革命とは、かれのいう社会の全体的なあり方、すなわち多様な社会文化的全体 (sociocultural differentiation) の変革 (transcendence) をいうが、この革命で図書や文化は一新され、街も新しいモデルで作り直される。それまで埋もれていた古いもので見直され脚光を浴びるものがある一方、それまでもてはやされていたもので失墜するものもある。これはツーリストの好み・意識 (consciousness) に基づくもので、ツーリズムはモダン社会を変革する革命の有力な形態である、というのである (q, pp.10-13)、いわば「ツーリズムによる革命論」である。その際かれは、こうした考え方の理論的源泉としてヴェブレンやK. マルクスを挙げており (q, pp.12-23)、その著の書名を“*The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*”とすることによって、ヴェブレンの“*The Theory of the Leisure Class*” (1899年: 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫) の今日版たらんことを示している。

以上で概括したツーリズム・システム論は、ツーリズムのプロセス、その構成要素における違いに根本的視点をおくものである。これに対して、こうしたプロセスのなかで進む内容に視点をおくと、ツーリズムは何よりも人々 (ツーリスト) が出発地 (多くは自宅) から観光地に移動すること (往復) を特徴とする。観光の根本をなす旅行は、本来、移動を根本的メルクマールとする。そこで、ツーリズム研究の基本を移動におくべしと主張する「移動性 (mobility) パラダイム論」が有力な考え方として登場している。これにも多くの論者がいるが、2009年それをまとめた形で提示したものにハンナム (Hannam, K. 参考文献m) がある。ここでは、ハンナムはじめ諸論者の所論に依拠して、移動性パラダイム論の特性を考察する。

## Ⅶ. 移動性パラダイム論

ツーリズムの隆盛を含めて、現代社会の全般的特徴を人間および物財の移動性に求める見解は、アーリ (Urry, J.: 参考文献η) やクレスウェル (Cresswell, T.: 参考文献h) などにより、ツーリズムを超えた社会学的研究のパラダイムの1つとして精力的に展開されている。それは現代社会全体をとらえる有力なキーワードの1つである。

この場合、移動性は、例えばアーリでは、組織された資本

主義 (organized capitalism) から組織揺らぎの資本主義 (disorganized capitalism) への移行にともなって (詳しくは参考文献κ)、人間や物財の土地拘束性が弱まり、流動的、可動的になったことをいうものであり、一言でいえば、土地への埋め込み離れ (disembedding)、場所移動 (displacement) をいう。長時間にわたり一空間に拘束されることが弱まるから、空間の一時性 (temporization) であり、時間の空間化 (spatialization) でもある (m, p.102)。

ハンナムによれば、この場合、移動性には3つのレベルがある。第1は、物理的に移動するという純粋な意味での動きで、経験的領域のレベルである。第2は、移動により考え方や価値観なども変わるとい意味のもので、思想的レベルのものである。その眼目は、移動の自由があってこそ人間の自由 (freedom) は実現されるというところにある。近代における自由な人間は移動に自由があってはじめて現実のものになったとみる。この意味で移動をとらえると、移動はさらに高次のレベル (第3のレベル) のものとなる。

ここでは、移動こそ人間性を具現化したもの (embodied) であり、精神性 (無形性) と有形性 (肉体的移動の側面) とを統合したプロセスとして把握されるものとなる。この第3のレベルのものが移動性・パラダイムの前提をなす。

ツーリズムに視点をおいた場合、その移動は何よりも、ツーリズム先で定住するものではなく、出発点 (多くは自宅) に帰ってくることを特色とする。この点からすると移動は、移動先での定住を前提とする移住と、ツーリズムのように移住ではない、単なる旅行とに大別される。

後者は、前者と区別される場合には、ノマド (nomad: 周遊者) もしくはノマドロギー (nomadology) といわれるが、移住が再住所化 (reterritorialization) であるのに対して、ツーリズム等は住所離れ (deterritorialization) という特色をもつ。従ってツーリズムは定住性 (sedentary) を克服するのに有効なものである。定住性とは1つの国や地域の社会的側面や歴史的文化的側面を含めてそれに浸り、その優先性に固執したりするものである。それ故、ツーリズムはホスト国 (地域) 対ゲスト国 (地域) の対抗性をなくすにも有用なものと位置づけられる。

ただしこの場合、移動性パラダイム論の根本的主張は、ツーリズムと他の移動とが本質的には区別されないものとするところにある。ツーリストを移動者一般としてとらえ、そうした移動性進展による社会の特性を究明する。そこで移動性論議には次の3点の論議が含まれるものとなる (j, pp.2-11)。

第1に、例えばツーリストの増加の反面には、ツーリズムに行けない人たち、すなわち非移動性 (immobility) の増加があり、移動性は非移動性と対 (つひ) をなすものではないかという問題である。第2に、移動性は技術的にはテレビや携帯電話等の映像通信技術の進歩と一体のものであり、それによりバーチャル・ツーリズムが進展するが、それは実際のツーリズムにどのような影響を与えるのかという問題である。第3



に、移動性の進展は大気汚染など地球環境悪化が伴うから、結局、「ツーリズムの終焉」(end of tourism)を招くのではないかという問題である。

「ツーリズムの終焉」という言葉は、もともと1994年アーリにより、組織揺らぎの資本主義への移行にからんで、マスツーリズムに典型的にみられるような集団で観て廻るようなツーリズムは終わったという意味合いで用いられたものであるが (o.p.259; ζ.p.147)、移動性パラダイム論でも無条件的なツーリズム振興論が主張されているのではない。

## VIII. 小括—観光学研究諸方向の整理の試み

以上からもわかるように、ツーリズム研究の方法論的立場は実に多様である。こうした状況に対して、近年では2007年、チャンバース (Chambers,D.) は、現時点で観光学研究の切り口となるパラダイム (cutting-edge paradigm) といえるものとして、次の5つのものがあるとしている (参考文献g)。

第1は、ツーリストの「本物・実物志向」(authenticity)にかかわるもので、1973年マッカンネルにより、それは結局「演出された本物・実物」を出るものではないことが主張されたが (参考文献p, 参考文献qに収録、詳しくは参考文献τ)、それを契機にツーリストの見ものは果していかなるものかが論じられ、最近ではツーリストは「何かを見ること」よりも「ゲームを楽しむこと」に重点があるという主張がなされているものである。

第2は、アーリの1990年の著 (参考文献ε) を代表的所論とするところの、ツーリストでは「見る目」(gaze) が違うことを主題とするものである (核心部分は参考文献σ、τで考察)。これは影響力が大きいものであるが、ツーリズムではそれ以外に、物的なものや肉体的なものが重要な位置を占めるという反論があり、アーリでも前掲著書の第2版 (2002年) で修正を行っている (ε,Preface to the Second Edition; g.p.236)。

第3は、1977年スミス (Smith,V.) らにより提起された「ツーリスト=先進国住民、ホスト=発展途上国住民論」(参考文献x) を骨子とする「ホスト・ゲスト論」(hosts and guest) である。先進国と発展途上国との経済的依存関係を中心的論点とするものである (核心部分は参考文献ρ、σで考察)。

第4は、1980年バトラー (Butler,R.W.) が提示した観光地ライフサイクル説 (参考文献f) を中心的論点とするものである (詳しくは参考文献μ)。

第5は、1993年プーン (Poon,A.) により提起された「古いツーリスト、新しいツーリスト論」(参考文献t: 参考文献μで言及) を契機とするもので、1960年代・1970年代のマスツーリズム全盛時代と今日とでは、ツーリストの性格が変わっていることを出発点にして、ツーリストの動機や行動等を主たる論点とするものである。

チャンバースの以上の試みは、現時点で強い論点となっているものだけに絞られたものである。チャンバース自身こうし

た性格のものであると断っており、さらにこうした分類の試みは必然的に歴史的に限定されたもの (historical contingent) であり、かつ、ある文化に限られたもの (culturally contingent) であるとしているが (g.p.234)、一般的なパラダイムの整理としては、対象が狭く、不十分なものである。今日の観光学研究の方法論的理論的諸方向としては、少なくとも一般的には、例えば経験理論と批判 (もしくは規範) 理論との区別が必要であるし、持続可能ツーリズム論やコミュニティ基盤理論等もそれ相応な位置を認められるべきである。

その一方、2005年には、ツーリズム研究をモダン理論 (modernity) とポストモダン理論 (postmodernity) に分ける試みがユリーリイ (Urieli,N.: 参考文献δ) によって提起されている。ただし、そこでいわれているモダン理論とポストモダン理論は、少なくとも現在のツーリズム研究では、概念的かつ時期的に明確に区別することが困難で、概括的な区別しかできないとユリーリイが断っているものである。そのうえでかれは、モダン理論とポストモダン理論との違いの一例として、ツーリストと非ツーリスト (日常生活従事者) との区別の問題を挙げ、モダン理論では両者の区別は必要であり、可能なものとされているが、ポストモダン理論ではそうした区別はできない時代となっており、理論上も区別は必要がないと主張されるもの (区別の消滅: de-construction, de-differentiation) になっているとしている。ポストモダン理論の有力な主張者であるアーリやラッシュ (Lash,S.) も、区別の消滅をポストモダンの第1のメルクマールとして挙げている (ε,p.75ff.)。

観光学研究における理論的方法論的整理の試みは以上に尽きるものでは毛頭ないが、少なくとも以上のような現状をみると、アメリカ経営管理論について1960年代クーンツが、それをジャングル状態と評したことを髣髴させるものがある (参考文献n)。クーンツはアメリカ経営管理論を6つの方向に整理している。それに倣ってチャンバースやユリーリイの試みを参考にして、主として本稿とこれまでの拙稿でとりあげてきたものを対象に整理をすると、概ね以下のような分類ができる。ただし、クーンツのそれが根本的には方法論的観点からの整理ではなく、多分に便宜的なものであったと同様に、これも方法論的に厳密なものではなく、便宜的なものである。

まず、学問方法論の土台をなす認識論的原理を問うものと、モダン・ポストモダンのように時代思想的相違に立脚するものとは、方法論的レベルがそれ以外のものとは異なるから、これらを3大種別として、そのうえにたって区分すると、パラダイムのなものとしては以下のようなものがあるといえる。

### [I] 認識論的原理の違いによる分類

- (1) 現実理論
  - ① 実証主義理論
  - ② 解釈主義理論
- (2) 批判理論
  - ① 批判主義理論

## ② 倫理的・道徳的（規範的）理論

## 〔Ⅱ〕時代思想的な違いによる分類

- (1) モダン理論
- (2) ポストモダン理論

## 〔Ⅲ〕問題のとらえ方の違いによる分類

- ① 観光原理論
- ② 持続可能ツーリズム論
- ③ 統合的ツーリズム論
- ④ ツーリズム・システム論
- ⑤ 移動性論
- ⑥ 観光客行動論
- ⑦ コミュニティ基盤観光地コラボレーション論
- ⑧ 観光地ライフサイクル論

以上のシェーマに入っていないもののうち、例えばトライブの2009年前掲編著で3大領域の1つとして挙げられている「美」の問題、あるいは「本物・実物志向」については、文化的観光（cultural tourism）として大きな分野を占めるが（参考文献τ）、文化的観光等は、観光の形態（form）による区分で（a,p10）、それにはさらに、例えばエコツーリズム、周辺地観光、農村観光、都市観光、山岳観光、サハラ観光、海洋観光など種々なものがある。

また、依拠する既存学問分野の違いの問題がある。これはアプローチの違いとして表現しておきたい。例えばサービス（論）的アプローチ、経営（学）（マネジメント）的アプローチ、経済（学）的アプローチ、社会（学）的アプローチ、地理（学）的アプローチ、芸術（学）的アプローチ、自然科学的アプローチ等である。なお、チャンバースの挙げたホスト・ゲスト論は経済（学）的アプローチの問題であるし、プーンの観光客論は観光客行動論の問題である。

観光学は、本来、これら諸アプローチを統合したものであるが、これらの諸アプローチがあることは否定されるものではない。そういう意味からも、本稿で提示した前記〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕で前提にしているものは、これらの諸部分的アプローチを統合した観光学それ自体の方法論的理論的諸方向である。

ただし本稿では、パラダイムとアプローチという言葉を厳密に用いているのではない。ちなみに、今日最有力のパラダイムとみられる持続可能ツーリズム論についても、それは実際にはうわべだけの「ベニヤ板持続可能性」(veneer sustainability)に終わっており、パラダイムの確立（paradigm shift）といえるものではなく、「パラダイムもどき」(paradigm nudge) 程度のものにすぎないという見解もある（i,p.35）。

こうした観点からいえば、上記〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕で挙げた区分は、現時点ではパラダイムというほどの広がりも、学派というほどの固まりもないものである。しかし、これにより現在の観光学の諸研究方向を展望する1つの試みにはなっていると史料する。

## 〔参考文献〕

- a: Ateljevic,J./Li,L., Tourism Entrepreneurship – Concepts and Issues, in: Ateljevic, J./Page,S.J. (eds.), *Tourism and Entrepreneurship*, Amsterdam: Elsevier, 2009, pp.9-32.
- b: Ayikoru,M., Epistemology, Ontology and Tourism, in: Tribe (ed.), *Philosophical Issues in Tourism*, 2009, pp.62-79.
- c: Ayikoru,M./Tribe,J./Airey,D., Reading Tourism Education: Neoliberalism Unveiled, *Annals of Tourism Research*, 2009, Vol.36, pp.191-221.
- d: Butcher,J., *The Moralisation of Tourism*, London: Routledge, 2003.
- e: Butcher,J., Against Ethical Tourism, in: Tribe(ed.), *Philosophical Issues in Tourism*, 2009, pp.244-260.
- f: Butler,R.W., The Concept of a Tourist Area Cycle of Evolution, *The Canadian Geographer*, 1980, Vol.24, pp.5-12.
- g: Chambers,D., An Agenda for Cutting-edge Research in Tourism, in: Tribe,J./ Airey,D. (eds.), *Developments in Tourism Research*, Amsterdam: Elsevier, 2007, pp.233-246.
- h: Cresswell,T., *On the Move: Mobility in the Modern Western World*, London:Routledge, 2006.
- i: Fennell,D., Ethics and Tourism, in: Tribe (ed.), *Philosophical Issues in Tourism*, 2009, pp.211-226.
- j: Gale,T., The End of Tourism, or Endings in Tourism? in: Burns, P.M./ Novelli,M., *Tourism and Mobilities*, Wallingford: CABI, 2008, pp.1-14.
- k: Gössling, S./Hall, C.M./Weaver, D.B., Sustainable Tourism Futures: Perspectives on Systems, Restructuring and Innovations (Introduction – Ohashi), in: Gössling,S./ Hall,C.M./Weaver,D.B. (eds.), *Sustainable Tourism Futures: Perspectives on Systems, Restructuring and Innovations*, London: Routledge, 2009, pp.1-18.
- l: Hall,C.M./Page,S.J., Progress in Tourism Management: From the Geography of Tourism to Geographies of Tourism – A Review, *Tourism Management*, 2009, Vol.30, pp.3-16.
- m: Hannam,K., The End of Tourism? Nomadology and the Mobilities Paradigm, in:Tribe (ed.), *Philosophical Issues in Tourism*, 2009, pp.101-113.
- n: Koontz,H., Management Theory Jungle, *Journal of Academy of Management*, 1961.
- o: Lash,Urry,J., *Economies of Signs and Space*, London: Sage, 1994 (reprint 2002).
- p: MacCannell,D., Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings, *American Journal of Sociology*, 1973, Vol.79, pp.589-603.
- q: MacCannell,D., *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, 3-rd ed., Berkeley: University of California Press, 1999.
- r: Netto,A.P., What Is Tourism? Definitions, Theoretical Phases and Principles, in: Tribe (ed.), *Philosophical Issues in Tourism*, 2009, pp.43-61.
- s: Pearce,P.L./Moscardo,G., Tourism Community Analysis: Asking the Right Questions, in: Pearce,D.G./Butler,R.W.(eds.), *Contemporary Issues in Tourism Development*, London: Routledge, 1999, pp.31-51.
- t: Poon,A., *Tourism, Technology and Competitive Strategies*, Wallingford: CAB International, 1993.
- u: Riley,R./Love,L., The State of Qualitative Tourism Research, *Annals of Tourism Research*, 2000, Vol.27, pp.164-187.
- v: Sharpley,R., Sustainability: A Barrier to Tourism Development? In: Sharpley,R./Telfer,D.J. (eds.), *Tourism and Development: Concepts and Issues*, Clevedon: Channel View Publications, 2002 (reprint

- 2007), pp.319-337.
- w: Sharpley,R., *Tourism Development and the Environment: Beyond Sustainability?* London: Earthscan, 2009.
- x: Smith,V. (ed.), *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1977.
- y: Throsby,D., Tourism, Heritage and Cultural Sustainability: Three Golden Rules, in: Girard,L.F./Nijkamp,P. (eds.), *Cultural Tourism and Sustainable Local Development*, Farnham: Ashgate, 2009, pp.13-30.
- z: Tribe,J., A Review of Tourism Research, in: Tribe./Airey.(eds.), *Developments in Tourism Research*, Amsterdam: Elsevier,2007, pp.3-16.
- a: Tribe,J., Tourism: A Critical Business, *Annals of Tourism Research*, 2008, Vol.46, pp.245-255.
- $\beta$ : Tribe,J. (ed.), *Philosophical Issues in Tourism*, Bristol: Channel View Publications, 2009.
- $\gamma$ : Tribe,J., Introduction, in: Tribe (ed.), *Philosophical Issues in Tourism*, 2009, pp. 3-22.
- $\delta$ : Uriely,N., The Tourist Experience: Conceptual Developments, *Annals of Tourism Research*, 2005, Vol.32, pp.199-216.
- $\varepsilon$ : Urry,J., *Tourist Gaze*, 2nd ed. (1st ed. 1990), London: Sage, 2002 (reprint 2009).
- $\zeta$ : Urry,J., *Consuming Places*, London: Routledge, 1995 (reprint 2006).
- $\eta$ : Urry,J., *Mobilities*, Cambridge: Polity Press, 2007 (reprint 2008).
- $\theta$ : Wall,G., Tourism and Development: Towards Sustainable Outcomes, in: Girard/ Nijkamp (eds.), *Cultural Tourism and Sustainable Local Development*, 2009, pp. 31-46.
- $\iota$ : Weaver,D., Reflections on Sustainable Tourism and Paradigm Change, in: Gössling/Hall/Weaver (eds.), *Sustainable Tourism Futures: Perspectives on Systems, Restructuring and Innovations*, 2009, pp.33-42.
- $\kappa$ : 大橋昭一「組織された資本主義から組織揺らぎの資本主義へー再帰的近代化の経営学への一過程ー(1)(2)」『関西大学・商学論集』1999年第44巻第5号51-69頁、2000年第44巻第6号1-20頁
- $\lambda$ : 大橋昭一「観光とソーシャル・キャピタルー観光地の戦略主体形成のための基本的枠組みの研究ー」『関西大学・商学論集』第53巻第5号、2008年12月、45-64頁
- $\mu$ : 大橋昭一「観光地ライフサイクル論の進展過程ー観光経営理論のさらなる発展のためにー」『和歌山大学観光学部設置記念論集』2009年3月、23-37頁
- $\nu$ : 大橋昭一「集合戦略からコラボレーション戦略へー観光地の戦略主体論の構築にむけてー」『和歌山大学・経済理論』第348号、2009年3月、1-29頁
- $\xi$ : 大橋昭一「コラボレーションー一般理論とコラボレーション優位ー観光経営理論の基礎概念の研究ー」『関西大学・商学論集』第53巻第6号、2009年2月、63-82頁
- $\omicron$ : 大橋昭一「コミュニティ基盤観光経営理論の諸類型ー観光地コラボレーション理論の形成ー」『和歌山大学・観光学』第1号、2009年4月、1-13頁
- $\pi$ : 大橋昭一「最近における観光客満足理論の諸類型ー観光経営理論の基礎概念の研究ー」『関西大学・商学論集』第54巻第1号、2009年4月、47-66頁
- $\rho$ : 大橋昭一「現代における観光の社会経済的意義と発展動向ー産業としての観光業の特徴についての考察ー」『関西大学・商学論集』第54巻第2号、2009年6月、13-32頁
- $\varsigma$ : 大橋昭一「観光地コラボレーション理論の展開ーコミュニティ基盤観光経営理論の発展ー」『和歌山大学経済学会・研究年報』第13号、2009年7月、31-61頁
- $\sigma$ : 大橋昭一「周辺地観光・農村観光・都市観光についての理論動向ー観光の価値創造性の観点からの考察ー」『関西大学・商学論集』第54巻第3号、2009年8月、15-34頁
- $\tau$ : 大橋昭一「観光分野における文化の意義をめぐる諸論調ー文化的ツーリズムの特性についての考察ー」『大阪観光大学紀要』第10号、2010年2月、投稿中

受付日 2009年9月24日

受理日 2009年10月1日



